

「真珠」「鬼才」「風雲児」—さまざまな呼び名を与えられた中村正義(皇朝出身/1924-1977)。

日展画家として前途を嘱望されながら、会員に推挙された1961年に師中村岳隆のもとを離れ、日展を脱退した正義は、以後旧態依然とした体制の日展画壇に反逆し、「日本画」の概念をくぐりかえりような表現を行い、戦後日本美術の流れの中でも特異な存在とみなされてきました。とはいえ、その活動は孤絶したものではなく、同時代の作家たちと深くつながり、台風の目のように周囲を巻き込んで美術界に波乱を巻き起こし、美術作家を取り巻く社会の在り方について問題提起を続けました。

生誕100年を記念する本展は、代表作による正義の概観はもちろんのこと、そうした交友関係にも着目し、関連する作家たちの作品もあわせて紹介することで、周囲との関係性の中にあためて正義を見出すものです。また、韓国や舞台美術、住宅や写真研究など正義の関わった多様な活動にも焦点をあて、約180点の作品と資料から正義の実像に迫ります。

「正義」はもともと半世紀が経過した現在一ふたたび正義とめぐり逢えるこの機に、その「熱」と「渦」をぜひ体感してください。

中村

NAKAMURA

—その熱と渦—

正義

MASAYOSHI

第I章

研鑽の時代 —日展と蒼野社

中村岳隆の画塾(蒼野社)に入門
早々、日展初入選を果たしたのは
正義22歳の時。以後、二度にお
たつて特選を獲得し、画壇の注目
を集めた。1946年以降の困難期か
ら日展特選作家となるまでの展開
を代表作で追うとともに、師岳隆
や兄弟子たちの同時期の作品を紹
介し、若き日正義を育んだ画塾
蒼野社の社風をみる。



中村正義(1946年) 1946年 東京美術会(日展)出品



中村正義(1950年) 1950年
東京国立近代美術館(日展特選)



中村正義(1952年) 1952年 東京美術会(日展)



中村正義(1955年) 1955年 日展

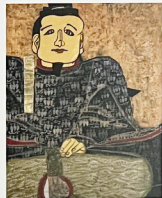
反逆の兆し —日展復帰と一采社

快進撃を続けた正義も病には勝てず、4年余りの療養生活を
送る。1958年の復帰後に発表された一連の日展展覧作品に
は、それまでとは異なる正義の方向性と戦略、画家として個性を
確立しようとする意志が垣間見える。そうした正義の変化と実
験性に影響を及ぼした高山辰雄や山本丘人など、研究グループ
(一采社)に関わる作家たちの作品も合わせて展観する。



中村正義(1958年) 1958年 東京国立近代美術館

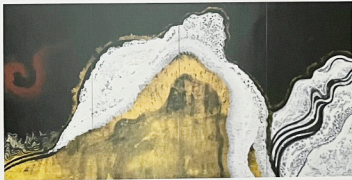
第II章



中村正義(1958年) 1958年
東京国立近代美術館(日展特選)



中村正義(1959年) 1959年 東京国立近代美術館(日展特選)



中村正義(1962年) 1962年 東京国立近代美術館(日展特選)



中村正義(1963年) 1963年 東京国立近代美術館



上原 三郎(1967年) 1967年 日展出品



中村正義(1968年) 1968年 三浦市立美術館(日展特選)



中村正義(1968年) 1968年 名古屋国立美術館(日展特選)

第III章

日本画壇への挑戦 —日本画研究会発足

1961年に日展を脱退した正義は、従来
の「日本画」のイメージとは真逆の色彩と
表現、手法で画壇を挑戦。一方でで野画
家たちとのつながりを求め、創生一歩ら
に呼びかけて「日本画研究会」を発足し
た。この時期の大胆不羈な正義の表現に
加え、研究会の片岡千子や横山操・加山又
造をはじめ、正義が想っていた先人の野画
家たちの個性が会場で競い合う。

第IV章

生と死の狭間で —一人会と東京展

屋野真吾・山下二郎らと美術グループ「人會」を
結成し、活動を開始した正義。その会場問題が端緒
となって(東京展)市民運動へと展開する。事務局
長として奔走する一方、癌の転移による闘病生活を
余儀なくされ、作品はしだいに死の影を深めて
いく。「人會」の同志や(東京展)に力を添えた野
上三郎・岡本太郎らの作品とともに、連続した戦
争の作品をみる。